
らき すた キミがいるセカイ NW

牛乳帝国

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた キミがいるセカイ NW

【著者名】

牛乳帝国

N5639G

【あらすじ】

NW。その少年の歩く道は、とても険しいものだった。だけど、立ち止まってしまった少年を再び歩き出させた少女達がいた。再び歩き出した少年の目の前には、どんな景色が広がっているのか。なら、一緒に見に行こうぜ、なあ?次のセカイへ、歩き出そう・・・。

第一章　一話「いざーー海へーー」

ん？俺になんか用か？

え？高校時代の話？

何だよやぶからぼうこ

まあ、俺の人生で一番充実してたってのは確かだと思つた
え？詳しく話せって？

お前つてそういう圖々しこうがいっぱいやつくりだな・・・・・

はいはい、話せばいいんだろ？

けど、あんまり期待するんじゃねえぞ？

期末試験が終わり、もうすぐ夏休みと言つ今日この頃
皆様いかがお過ごしだらうか

授業が終わり帰り支度をしていると

「海にいかないか」

「なんだやぶからぼうこ」

「なたが突然こんなことを言って出した
だから、海にいかない?」

「海・・・・・・ねえ」

いきなり海と言われてもな・・・・
(そういえば眞、梨花と行つたな・・・・)

『おにいちゃん!!はやくはやく!!』

『ちょ、ちょっと来てよーーー』

・・・・・・・・・・・・・

「りかああああああああああああああーーー」

「あーあ、シスコンお兄ちゃんモードになっちゃったよ
し、シスコンじゃない!!妹思いなだけだ!!」

「十分シスコンよ

お?この声は

「かがみか」

「大正解」

かがみいつものツインテールで現れた

「かがみん、つかさたちは?」

「もうすぐ来るわよ」

ちなみに今この場にいない一人

つかさは授業中に鳴つてしまつた携帯を黒井先生に返してもらいに行つてゐる

みゆきは委員会関係の仕事中だ
すぐ終わるそだから待つてゐる

「あ~、そうだセイカ君」

「なんだよ

「海に行く日の予定はあいてる?」「かがみが聞いてきた

俺は携帯の予定表を見る

「ああ、特に用事は無いな」

「それじゃあ決まりだね!-!」

俺には拒否権は無いのな・・・

いつものことだ

朝の7時に泉家に集合!-!か

「で、何でその泉家に住んでるお前が一番遅いんだよ」

「むしろ何でセイカ君が一番乗りだつたのか聞きたいね

昨日一緒に最後までネットゲやつてたのに

「知るか」

昨日俺とこなたは同じネットゲをやつていたんだが・・・・

なんか敵の沸きがよくて朝の4時くらいまで狩り続けていたのだ

「つていうか、俺も結構眠いぞ・・・・ふあ」

「しゃきっとしなさいよ」

俺が到着してすぐにやつてきたかがみが言つ

「海つてひさしひりだよ~」

「楽しみですね」

つかさとみゆきはすでに気持ちが海のほうへ行つていいようだ

「お、お待たせしました~!-!」

「ん?」この声は・・・・

「ゆーちゃん、体調はいい?」

「うん!-!いつもより気分がいいよ」

「小早川もメンバーだつたんだな」

「うん、おとーさんが仕事関係のパーティーに呼ばれちやつたからなるほど、小早川が一人になつちまうな

それでついてくるつてわけだ

「平野先輩、こんにちわ」

「おひ、旅行の間よろしくな」

頭をなでてやると嬉しそうにはにかんでいた
なんていうか・・・・・普通にかわいいな
こなたもこれくらい可愛げがあればいいのに・・・・・

「何か失礼なことを考えてない?」

「気のせいだ」

毎度毎度こいつは勘がいいな・・・・・

「そして引率はウチらや」

「げえつ！－黒井先生！」

「げえつ！－ってなんや？あ？」

「なんでもないでs・・・・・・」

なんでもないです

と言おうとしたがもう一人が目に入ってしまった

「わったしもいるよ～！－」

「成美さんつ！－」

え？なんで自慢げに車の前でガツッポーズしていらっしゃるんですか？
あのチヨメチヨメドも真っ青な車に乗れと？

「黒井先生！－今回はよろしくお願ひします！－」

「お？おおう！－まかせとき！－」

「よし、俺は黒井先生のほうの車に乗るからな」

「（セイカ君、逃げたね・・・）
んじやあ私も～」

と言いながらこなたが黒井先生の車に荷物を積み始める

「わ、わたしも～」

こなたに次いで小早川も

そりやあ小早川はあの運転を知ってるもんな

「それじやあ私達は成美さんの車ね」

「成美さん、今日はよろしくお願ひします」

「お手数おかげします」

かがみとつかさとみゆきが成美さんに挨拶をしている
すまん、俺達を救ういけにえとなつてくれ！！

「それじゃあ出発するよーん！！」

成美さんが高らかに車にエンジンをかけた
俺とこなたは前方の車に敬礼をした

（かがみ、つかさ、みゆき

お前らのことは忘れないよ・・・・・・）

その後、悲鳴がどどいたのは言つまでも無い

10分後

「黒井先生」

「なんや」

「ここはどこですか！！！」

今俺達がいるのは思いつきり山の中

さつきは小学校のグラウンドに突っ込んだらなんかよく分からぬ
密林に突っ込んだり

（くそ……どっちもはずれだつたか！！）

「海だな・・・・・・」

「海だね・・・・・・」

「海ですね・・・・・・」

俺、こなた、小早川は海を見つめる

その隣にはかなり顔色を悪くしたかがみ、つかさ、みゆきがいる

すでに空は夕焼けのオレンジに染まっていた・・・・・

「時間がかかりすぎだあ
！！」

一話 いざー！海へー！

おわり

第一章　一話「いざーー海へーー」（後書き）

さーて！…次回のキミセカノWは！？

セイカだ

まさか黒井先生が方向音痴なんて・・・・・
さすがに予想してなかつたぜ

次回は海でひたすら泳ぎまくる！－！

ぶふつ！…！なた！…お前なんてかつこうじてるんだ！－！

次回

「砂浜の水着パラダイス！－！」

俺にとつては、地獄だよ・・・・・

第一話「(死亡) フラグメイカー」(前書き)

「話題にしてやつやくの次回予告変更
正直スマンかつたー！」

第一話「（死亡）フラグメイカー」

第一話

「あ～、どつと疲れたぜ・・・・・・」

自分の部屋に倒れこむ

自分の部屋と入っても旅館の自分に割り当てられた部屋だが
疲れてる理由なんてひとつ

やけに時間がかかった黒井先生の運転だ

おそらく成美さん組も部屋で休んでいるだろう

かがみに聞いた話だとやっぱり峠で他のドライバーと一緒に戦したようだ

それでいいのか警察官・・・・・・

「お～い、セイカく～ん」

そとからこなたの声が聞こえる

「はいはい、なんだよ・・・・・・ぶふつ！－」

目の前にはなぜかスク水姿のこなた

「なななんんちゅーかつこ～うしてるんだお前は－－」

閑話休題

後からやつてきたかがみの鉄拳制裁によつて自室に強制送還された
こなたが浴衣を着なおして帰ってきた
ほかのメンバーも浴衣姿である
ちなみに作者が「ゆかた」と打とうとして「ゆたか」と何度も打ち

間違えたのはひみつだ

とりあえず感想を一言

「こなたと小早川のサイズの浴衣があったのか・・・・・・」

「こなたと小早川（主にこなた）にすつこいにらまれた

「だけど、みんな似合つてゐるや」

そんなこんなで温泉に向かう

ちなみに引率組はすでに酒盛りを始めているらしい
晩飯もまだなのに・・・・飲んだくれめ

「温泉楽しみ」

つかさがお風呂グッズを片手に機嫌な表情で歩く
好きなんだろうか、温泉

「お風呂は好きだけど階で一緒つて言つのがうれしくて」
なるほど、つかさらしい理由である

「セイカ君、覗いたら殺すわよ」

「そんなつもりは毛頭ございません」

かがみの「冗談なのかよく分からぬ忠告を一応聞いておく
まあ、そんなマンガみたいな展開は無いさ
・・・・無いと信じたい！！

「・・・・なんで誰もいないんだ？」

俺が温泉に入ると中には他の客が一人もいなかつた
一人くらいはいてもおかしくないのにな

「・・・・まで、なんか嫌なフラグが立つた気がする」

露天風呂＆思いつきり突つ込めば穴ぐらい開きそうな男湯と女湯を
隔てる柵

「できるだけ柵には近づかないでおこつ」

『やつぱりみゆき胸おつきいわね～』

『高良先輩つてスタイルよくてうらやましいな・・・・・・』

『大丈夫だよゆーちゃん！！貧乳はステータスだ！！』

『この中だとゆきちゃんの次にはお姉ちゃんがおつきいんだね』

『つ、つかさ！！余計なこといわない！！』

・・・・・あいつらには羞恥心つて物が無いのだろうか

聞いてるこっちが恥ずかしい

「おーい！！ほかの客の迷惑になるからあんま騒ぐなよー！！」

こっちには客はないが

『だいじょーぶ！！こっちは一人もほかのお客さんいないからー！』

！』

なんと、女湯もこんな状況らしい

この旅館の経営は大丈夫なんだろうか

「つと、俺はそろそろ上がるぞー！！」

『ほーい！！』

さすがにつかりすぎた

「こpmatまだとのぼせそつだ・・・・・・・つと」と
いきなり湯船からあがつたので軽くめまいがした
倒れそうになつたが柵にもたれかかつて事なきを・
・・・・・ん？柵？

フラグ ON!!

ミシ・・・・・・

何だこの音は？

具体的には柵と柵をつなぐロープが切れそうな

ご 答

「うわわわわー！」

柵に全体重を乗せていたので抵抗などできましょん

柵の一角が倒れて・・・・・

「あ・・・・・

「「「「「あ・・・・・」」」」

・・・・・・・・・・・・・

とても神秘的な光景である

どちらだと聞かれれば美少女の部類に入る女の子が女湯にいる
もちろん「お風呂＝裸」だ

湯船に使つていたのでもちろん体にタオルなんて巻いていない
湯船にタオルは入れちゃいけないからな

これ、お兄さんとの約束だぞ？

よいこの皆はちゃんと守ろうね？

まあ、タオルなんて巻いてないってことはその・・・・・はだか
を丸出しなわけ

それは俺も例外じゃないわけで

「「「「「・・・・・」」」」

沈黙が続く

「セイカ君、辞世の句は読めたかしら？」

がんばつて手で胸を隠そうとしているが無駄な努力のかがみさんが

言いました

「今まで楽しかった、ありがとう」

二三九

ああ、今お前のところに行くからな？梨花……………あと、かがみ

お前ダイエツ

こなた、小早川、まだまだこれから成長するさ・・・
つかさ、控えめだけど俺はいいと思つたぜ・・・
みゆき、お前は反則だ、OGだおっぱいシェネレーション

その後、俺の意識は途絶えた

第一話「(死亡) フラグメイカー」(後書き)

わーい！ 次回のキミセカノは！？

こなたです

水着はさすがのセイカ君も驚いたよね
作戦成功！！

裸を見られた・・・・・・
なんで？ なんで「こんなにどうぞ」といふんだろ？？？？？

次回「浜辺のマイクロロ」

なんだる、この感じ

(内容は変更する可能性も無くはない)

第三話「浜辺のハイカラ」

第三話

「青い海つ！！」

「白い砂浜」

「焼け付くような太陽」

「ついでにみゆきさんのおっぱい！」

上からかがみ、つかむ、みゆき、言わずもがなこなた
つておい、最後は違うだろ
まあ、シメは俺だな

「海だあ
！！」

「まだに昨日のかがみの攻撃が痛いが我慢しよう
つていうか、昨日のアレはその辺の不良の一撃よりもきつかった
さて、同級生組は海へ走つていったが

「あんた達は・・・・・・」

後ろを見る

そこには一日酔いで死に掛けている引率組がいた

「教師に……むかって……アンタとはなんじやぼけえ……」

「そんな青い顔で言われてもまったく怖くないですよ
いつもの勢いはどこへやら

完全に生ける屍と化している

「うう、一日酔いするなんて……

おねさんびっくりだ」

「お姉ちゃん、大丈夫？」

小早川が成美さんの背中をさする

ふむ、中のいい姉妹の図だ

(・・・・・いや、お母さんと娘にも見えるが)

小早川はちつこいからな

「ゆたか、もーいいよ

こなたたちと遊んでおいで」

「本当に大丈夫？」

「へーきへーき

せっかくの海なんだから楽しんでらっしゃい……」

成美さんの言葉で小早川が俺のほうに駆け寄ってきた

「それじゃあ先輩、いきましょうか」

「おう、あの一人はほつとけばそのうち元に戻るぞ」

「セイカ君……そつちいつたよ……」

「飛ばしそぎだ馬鹿……」

現在泳ぎにあきた俺たちは砂浜でビーチバレー中である

といつてもネットも何もなくただボールをバスしあつてるだけだが

「ほらほら……セイカ君すきだらけよ……」

「いてつ！！」

ドッジボールじゃねえんだからやーーー！」

いくらかはしゃいだ後、俺はひとまず抜けた近くで休んでいる小早川んところへ行く

「大丈夫ですか？」

「ああ、一応な」

かがみのやつ・・・・・・本氣でぶつけやがって
ビーチボールでも思いつきりぶつければ痛いんだぞ？

「小早川は体調は大丈夫か？」

結構はしゃいでたけど

「はい！－なんだかすごく調子がいいんです
先輩がいるからかな？」

小早川の言葉に首をかしげる

「ん？ 何で俺？」

「なんだか先輩といふと落ち着くんです・・・・
それにお兄ちゃんつていうのに少しあこがれてましたから」

えへへ、と恥ずかしそうに笑う

なるほど、こなたが真の妹属性というだけあるな

「ならお兄ちゃんつてよんでもみたら？」

「うおっ！－！」

後ろからの声に振り返る

そこにはニヤニヤ顔のこなたと成美さん

つてか、成美さんはいつの間に復活したんだ

そしてこなたはいつの間にこっちに来てた

「いやー、セイカ君とゆーちゃんが兄妹オーラ全開だつたから

「どんなオーラだ」

こなたとのやり取りの最中に視線に気づく

「あのー、先輩？」

「なんだ？」

小早川がじつとこっちを見ていた

「ね兄ちゃんって、呼んでもいいですか？」

「...」

「し、しまつた！！

システムのセイカ君には強力すぎたか！！」

さかだち騒ぐ

破壊力抜群すぎるぜ今のは・・・・・

「ああ、好きに呼んでくれ！」

「うー、ひどいー」

「ん！！お兄ちゃん！！」

モルヒネ

「ねえつかさ、みゆき」

「どうしたのねえかやん？」

「アーリー曲ついで」

記憶を取り戻してからキャラ変わってない?」

「たしかに・・・・・」

「そうですね・・・・・」

「さて、昼飯やー！」

「復活早いですね・・・・・」

案の定元気を取り戻した黒い先生を先頭にして海の家に入る
それぞれラーメンだのフライドチキンだのを注文する
ちなみに俺はかがみと同じくラーメンである

「いただきます」

全員に食事が届いた

「おお！！期待通りだ！！」

「どした」

「みてよこの見事に具のないカレー！！
こなたが皿を突き出してくる

「おお、確かに典型的な海の家カレーだ」
野菜のかけらのみ、肉なし

見事な安物カレーだ！！

そしてそれにつりあわない高い値段！！

「ふはー！！やっぱ海のビールは最高や！！」

「つてーー！アンタはまた飲むのかーー！」

「だいたい、フランクフルトが一本三百円とかおかしいんですけど
ね」

「たしかにな」

「けど、気にせず食べちゃいます」

かくいうゆたかが持っているのはその一本三百円のフランクフルト
だつたりする

「私このチキンの油っここのとかスパイスかかりすぎてるのとかも
実は好きだつたり」
つかさが食べかけのフライドチキンを差し出す

「一口食べる？」

「お、サンキュー」

むしゃり

「油っここーー！ってか辛つ！！けどそれがたまらん・・・・・」

「こういったプレーンな焼きそばもなかなかいですね
みゆきが焼きそばの入ってるトレーを持ち上げる

「あ、セイカさん一口いかがですか？」

「いいのか？それじゃあ・・・・・」

するする～

うん、このもともとしててキャベツが少ししか入ってないとこりが
いい

夏祭りの出店とかもこんな感じだよな

「おお！なんかおすそ分けブームだね！！」

それじゃあ私のカレーも」

こなたがカレーの入ってるスプーンを差し出す

「・・・・・なんだよ」

「だから～『あーん』つてや」

「ぶふつ！何いつてんだおまえは！？」

しかしこなたはいまだに「ホレホレ」とスプーンを差し出してくる
ええい！～

ぱくっ！～

「はいセイカ君、間接ちゅ～いただきました～」

「ぶふつ！～」

「げほつ！～

「ここここなた！～あんたなにやつてくれさせあらつめふじこ
1p!～」

お、おちつけかがみ！～

「じ～」

「じ～」

「じ～」

「じ～」

はっ！～なんか四方から視線が・・・・・

こなた view

うわ・・・・・こきおいでやつひやつたけど・・・・・
これほんとに間接キスだよ・・・・・
どうしょ、ドキドキがとまんない・・・・・
やっぱり、私って・・・・・
・・・・・セイカ君は私のことじびり細ひでるんだろう。

セイカ view

部屋にしかれている布団に身を投げる
全員からの「あ～ん」ですっかり疲れた・・・・・
周りからの視線も痛かったし・・・・・
「・・・・・明日で旅行も終わりか」
長いよつであつという間だつたな
そこはかとない寂しさもある
そろそろ寝ようか・・・・・
「おやすみ・・・・・

その後

俺の部屋に一人の来訪者が来ることになる

第三話 おわり

第三話「浜辺のハイキング」（後書き）

それで、次回のキミセカンドは…?

かがみです

今日のこなたなんか変だつたわね
いつもと違うといつか・・・・・まあいいか
いや、私は平氣よー!?
ぜんぜん怖くなんて・・・・・ひひやあー!

次回「最後の夜、ホラーの夜!!」

お、おたのしみに〜

第四話「最後の夜！！ホラーの夜！！」

第四話

こんこん

浅い眠りに落ちていた俺の耳にドアをノックする音が入ってきた
むぐりと布団から体を起こす

「ん～・・・だれだ？」

こなたか？

いや、あいつは「こんこん」じゃなくて「どんどんーー！」だな
すると・・・・・だれだ?
ととりあえずドアを開けた

「よつす」

「なんだ、かがみか

どうした？」

目の前には浴衣姿のかがみがいた

「ねえ、少しいい？」

本当は眠るつもりだったのだが・・・・・
まあ、いいか

「ふう、外の空気は気持ちいいわね」

「そりか？大して変わらないと思うが」
けど目を覚ますのにはちょうどいいな
潮風だからあまり気持ちがいいとはいえないが
鼻に入る潮の香りがここが海なんだと思いで出させてくれる

「つてかどうしたんだ?こんな時間に」
腕時計が指している時間は午後10時

「ちょっと話したいなって思つただけよ」

「ふうん・・・・・・・・」

かがみは宿の前にあるブロックに腰掛けた

「あんたも座つたら?立ちっぱなしじゃきつこでしょ」

言われるがままにかがみの隣に腰を下ろす

そこまで大きいブロックじゃないので完全に密着した形になる

(つてか、いい匂いがする・・・・・・)

かがみが風呂上りだからだろうか

それとももともとの匂いなのか

(つて、なに考えてるんだ・・・・・・)

普段は口が荒いがこういうときはかがみも女の子なんだと思つ

「・・・・・・ねえ、セイカ君」

「んあ?」

さつきまで黙つて空を見上げていたかがみが話しう出した

「私た、今すぐ楽しいのよ」

「?」

「こなたもつかさまみゆきも・・・・・セイカ君も隣にいる
それでバカなことで笑つたり喧嘩したりする今が・・・・・す

「ぐ楽しい」

「・・・・・・かがみ?」

「ずっと続ければいいなって思うんだ

バカだよね、ずっとなんてあるはずないのに
ずっとなんてない

そうだ、いつかこの楽しい日々も終わりを告げる

そう、いつかは終わってしまうんだ

「・・・・・・だから、後悔したくないのよ」

「後悔?」

「・・・・・・そう、後悔」

そういうとかがみは俺の肩に頭を乗せた

「……………どした？」

「……………ごめん、すこしこのままでもいいかな」

「……………ああ」

かがみの頭を肩に乗せのせたまま空を見上げる
この空には終わりがあるのだろうか

どこまで続くんだろう

気がついたら、俺はかがみの手を握っていた
なぜかはわからないけど……………

ただ、隣の小さな存在を確かめた語つただけなのかもしれない

かがみ▼i e w

ごめんね、セイカ君

まだ・・・・・まだ言えないんだ

自分でも、この気持ちが本当かわからないから
だから、もう少しだけ待つてほしい

私の想いは叶うかどうかわからないけど

もう少し、この幸せな時間を・・・・・

セイカ▼i e w

かがみを部屋に送り届けた後

俺も自分の部屋に戻ったのだが・・・・・

「…………トイレ」

とこりわけで廊下のトイレに行こうとしたところ

「お～、いたいた」

前からアホ毛幼女が走ってきた

「…………夜中に騒ぐんじゃあつません」

「はいはい、それはそうとけよ」とうちの部屋にきてよ」

「…………わかった、その前にトイレに行かせてくれ」

「それでね、これは実際にあつた話らしいんだけど…………」

かがみがつばを飲み込む

つかさとみゆきは抱き合ひ黒井先生と成美さんが固唾をのんで聞き入っている

ゆたかは俺の袖にしがみついている

「あるアニメーターが仕事帰りのバスで疲れがたまつてたのか寝ちゃつてね？」

「…………おい、何でみんなそんなに怖がってるんだ

これどつかの掲示板で読んだことあるきがするぞ

「運転手さんはその人がまだ残つてることに気づかなかつたのかおもむろに…………」

「DANNEZ一人はプリ ュアを歌いだしたんだよ

「…」

卷之三

いぞ
・・・・・こなた、それって話が怖いって言つよつお前の顔が怖

「ごめん、私少しお手洗いに……」つかさが席を立つた

「たが入り口で止まっている……………」
「…………ついでいってやろうか？」

やつぱり怖かったのか

「うめんね、どうしても怖くて

「まあ、わいせつの（顔が）怖い話の後じやしうがないさ」

卷之三

「わかつたから早くしろ」

つかさがトイレに引つ込む俺は壁にもたれかかって時間をつぶした

「ね、ねまたせ~」

よしやせとか

御子を振り向いたときが、がんば

「スキヨです」

「ぬおあー！」

「ひやうー！」

某一族のマスクをかぶつた奴の顔が！！

しかし、そのスケヨはマスクを取つた

その顔は

レバノンの政治情勢

こなたを追い返して元の部屋まで戻つてくる
がらつ、ヒドアを開けると

「犬神家！！」

「…」

「……………やつらにやつてんだおまえは」

こなたが足だけを布団から出して例のポーズを取つていた

「からかいがいあるなあ　ｗｗ」

そんな感じで最後の夜は更けていった・・・・・・

第四話　おわり

第四話「最後の夜！！ホラーの夜！！」（後書き）

さーて！！次回のキミセカは！？

つかさです

昨日メールでこなちゃんにお祭りに行かないかって誘われたの
日本で最大級のお祭りなんだって！！
たのしみだな）

けど動きやすい服装でって・・・なんでだろ

次回

「聖地での戦い」

ふえ～ん！！セイカ君！！たすけてーーー

おたのしみに！！

第五話「聖地での戦い」

第五話

「あー、あづーい・・・・・・・・」

俺は学生服で通学かばんを手に持ち学校への道のりを歩いている
なぜ夏休みに学校に行くかつて？
そりゃあ・・・・・・

補修だからさ！

一週間ほど前

「平野一、ちょっと来いや

「なんですか？」

黒井先生に呼び出される

「ほいこれ、古文と英語の先生からや

そういうて一枚の紙を手渡された

そこには・・・・・・

【夏季長期休暇補修の案内】と描かれていた

「・・・・・これは一体？」

「みでのとおりやな

あー、つまりだ

文型のくせに古文と英語ができるないとはこれいかに
と思つた先生方がありがたい講義をしてくださるあれか
あー、なるほど・・・・・

そして今に至る

「さつすがセイカ君！…私たちの期待を裏切らない…」

「いいんだよ、毎年あきらめてるから」

案の定といふかなんと言つか・・・・・

目の前にはこなたつかさがいる

「セイカ君は二つだけかもしれないけど私は三つあるんだよ・・・

・・・

つかさが言つた

「まあまあ、そんなくらい話題はおいておいてやれー」

こなたが話題を変える

「なんだよ」

「お祭りにいかないか

「こなちゃん、それ海のときと同じノリだよ?」

「つかさ、お笑いには同じネタを繰り返すといつものがあつてだね・

・・・・・」

・・・・・・・・・かがみ、だめだ

俺一人では突つ込みきれない・・・・・

・・・・・

「で、祭りつて？」

「ああ、東京のほうで大きい祭りがあるんだよ」

「へえ、夏といえば祭りの季節だからな
一緒に行くのも悪くない

「いいぜ、一緒にいってやるよ」

「わたしもー、お祭りって大好きだから」

「おくおく、日程は後でメールするね」

そのときの俺は、なぜ行くといつてしまつたのだろうか
なぜこいつの行きそうな夏に行われる祭りを忘れていたのか
今となつては後悔しても遅いのである

「えーと、財布持つたし携帯持つた

けど何で動きやすい服装なんだ？」

こなたのメールにあつた物をそろえる

「つてか、何で祭りに糖分ありの飲み物なんだよ
むこじうの屋台で帰るだらうに・・・ラムネとか

まあ、文句を言つても始まらない

待ち合わせ場所の駅に向かうべく俺は家を飛び出した

「悪い！待たせた！！」

「遅いよー、早くしないと電車出ちやうじやん」

「そもそもこんな朝早くに集合する意味あるのか？」

その祭りとやらはこんな朝早くからやつているものなのだろうか
ちょっと早すぎるとと思つ

「そしてかがみもいたんだな」

「・・・・あんな魔境につかさを一人で生かせるのは忍びなく
つてね」

は？魔境？

ちょっと待て、何で祭りが魔境なんだよ
「行けばわかるわ、そう・・・避けば」

何かかがみが遠い目になつてゐる

・・・・・ちょっと不安になつてきた

電車に乗つて数分

いくつかの駅を過ぎると次々と人が入つてくる
一般の服装の人だけではなく秋葉でよく見かけるタイプの人間がち
らほら・・・
いや、めちゃくちゃいる
ここで気がついて引き返してれば・・・
それも今さらである

駅からひとつつの建物に向かつて伸びる黒い線
それが人であるのは一目瞭然である
そしてその先にたつているのは
某逆三角形の建物だつた・・・・・

第五話「聖地での戦い」（後書き）

あ、あれ？ こ、じ、ど、こ、だ、？

南の、こ、-、2、？ こ、こ、東、？

おーい、こなたー、かがみー、つかさー・・・・・・・・

次回

第六話「迷走」

誰か・・・助けてくれ

第六話「迷走」

第六話

「かがみはこれ、つかさはこれ、セイカ君はこれだからねーー。」

こたたたたと線を手渡される

そこには会場内詰の見取り図は丸がついていた
「丸がついてるサークルの新刊を最低ひとつづつ

アホだよ!! 聞いて!!

そしてさらに紅茶のボトルと財布を
ミルクティー

「適度に水分補給を忘れないように

それで12時になつた頃の丸のどに門には集合ね

۱۵۱

まで、何でこうこうときだけお前はハキハキしゃべるんだ

「じゃ！！解散！！」

「あー、ひとつ、西A-4つと……」

「さあ、この辺の地図を見ながらサレクルを探す

そこには長蛇の列

30分はかかるか・・・・

30分後

「えーと、とりあえず新刊全部三冊ずつ」

「はい…3000円になります…」(レバーベジタリアン)

「はい」

「ちょうどお預かりします…！…ありがとうございました…」

ようやく列から抜け出す

その後ろにはまだ大量の人間が並んでいた

「日本にはこれだけのこなたと同種の人間がいるんだな…」
軽く日本の未来が気になる光景である

「えーと、次は一つと…」

「つぎは二か…」

俺はすでに8つのサークルを回ってへとへとである
「けどここで俺の担当は終わりだ…」我慢我慢
「こなたには今度飯をおひらせてやる

学食のAランチ（1300円）でいいか

「あれ？ 平野先輩つすか？」

「！？」

「！」の声は…

「うわーっ！ まさか先輩がここにいるとは…！」

「た、田村あ！？」

そう、我等が腐女子その一人と田村ひよりである

「お、お前こんなところで何を…！」

「わたしはこここのサークルのメンバーツスから
むしろ何でこうのうのに無縁そうな先輩がここに…」

少年説明中 …

「なるほどー、泉先輩の付き添いつすかー

「ああそうだ！！決して俺が行きたかったわけじゃない！！」

「う、勘違いとかはされたくないからな

「あ!!! セーちゃん先輩!!!」

・・・この声、この呼び方！

「や、八坂！！」

「わせ……おやかせーちゃん先輩といんな場所で会うとは……」

少年説明中

卷之三

ナレッジマネジメント

これでわかつてもらえるは Z · · · ·

「嘘だつ！！！」

いや、そんなどつかのしらの女の子みたいな呼び方をされても・・・
「せーちゃん先輩に友達なんているはずない!!」

「ひでえなおい！！」

「 確かは中学時代の俺からには老えられないが、だが、まあ、前二一歳二重ハ初ハ二三キ聞ハニシテ」

お、こゝの落ち着きのある趣は……

「永森！！」

おもしろいです

「あへ? なんで永森まで二二二二ある? ど

もしかしてお前も八坂みたいな趣味に田ざら・・・」

「ちがいます！！ただの手伝いです！！」

いや、「冗談だからそんなに叫ぶな

周りが見てるぞ

「・・・コホン、先輩は本を買いにきたんですね
いくついるんですか?」

「えーと、新刊全部3つずつ」

「はい、4200円です」

「いいのか?俺まだ順番きてないだ」

「いいんです」

永森にお金を渡して本を受け取る

「悪い、助かつた

それじゃあ俺みんなのところに戻るから!!--」

集合時間も近いので挨拶もそこそこに駆け出した

やまと view

「・・・せーちゃん先輩、笑うようになつたね」

「そうね、ちょっと悔しいかな」

自分たちではできなかつた

彼と一緒にいた時間はそのお友達よりも長かつたはずなのに

「・・・それはそうと、やっぱり人手が足りないねー」

「そうね」

平野先輩と話してた分だけ仕事がたまつてしまつた

「・・・お、そうだ!!」

ひょりん!! その泉つて人に連絡取れる!?

「はい?まあ、取れますけど」

「今すぐに連絡とつて!!」

・・・こうが笑つてる

この笑顔は・・・絶対によくないことを考へてる顔だ

「はあ？サークルの手伝い？」

「うん、さつきひよりんからメールがあつてね」

「・・・まさか、田村のサークルの手伝いか？」

「そのとおりさ！…」

びつ！…と、こなたが親指を立てる

「こなちゃん、わたしはちょっと…・・・

つかさはさつきまで会場をさまよいまくつて体力の限界に達したようだ

「大丈夫！！手伝いはセイカ君だけだし」

「はあ！？」

何で俺だけなんだよ！！

「つていうか、お前に来た依頼だろ！？」

かがみとつかさはいいにしてもお前は行けよ！…！」

「いやー、私は小神あきらのステージ行かないといけないからさあ

」

こいつ・・・殴りたい

「セイカ君、私も行こうか？」

かがみが救いの手を差し伸べた！！

だけど・・・・・・

「いや、かがみはつかさのそばにいてやつてくれ
また迷子になつたら大変だしな」

というわけで、俺は一人でさつきのサークルの場所まで向かつた

「おー！來たっスね！…！」

「きてやつたぞ、ありがたく思え」

「まあまあ先輩、一応バイト代だすんで勘弁してくださいっス

まあ、ならいいだろう

こんなイベントのために今日はバイト休みにしてもらつたしな

「」で稼ぐか

「おー！せーちゃん先輩さつきぶり！！」

「さつきぶりです」

八坂と永森が合流する

・・・・ただ、気になる点がひとつ

「永森、その格好・・・・・」

「に、似合いませんか？やつぱり・・・」

永森は八坂に着せられたのかメイド服を着ている

「いや、めちゃくちゃかわいいと思ひだ」

「あ、ありがとうございます・・・・・」

「スプレが恥ずかしいのか顔を赤らめる

ホント、永森は女の子だな

こなたとかにも見習つてほしい

「はいはい、せーちゃん先輩はフラグ乱立しなくていいから
先輩には密引きしてもらうんで」

「密引き？」

「はい、まあ密引きって言つてもこれ着てお密に声かけてくれれば
ばっちりです！」

そう言つて八坂が一着の服とカラーコンタクトを差し出した

「・・・なんだ、そのどつかのエースパイロットが着る赤服と赤い
カラコンは？」

「やだなー、シ・アスカ変身セッタースよ」

「なんでその衣装なんだ？」

「今回の本は「キ×ン」本なんですよ」

「B」かよーー。」

「いらっしゃいませえええええええええええーー。」

「おお、中の人ネタでも普通にわかる人が多いな
けど、この服蒸れるな」

終わつたらシャワーでも浴びるか

「先輩、大丈夫ですか？」

「おお、永森

今んとこ大丈夫だ・・・って、今度の格好は・・・
「先輩が今やつてるキャラクターの妹の『スプレ』だそうです
これ着て一緒に寄引きしてこいつて」
・・・ホントにあいつらは何でも持つてるな
「で、具体的にどうすれば・・・」
「・・・・えい！」

永森が掛け声と同時に腕にしがみついてきた
「えつと・・・お兄ちゃん」

ズゴーン！！

「だ、大丈夫ですか先輩！！
やっぱ変でしたか？」

い、いかん・・・

ゆたかとは違つたかわいさが・・・

つてか、永森の雰囲気が微妙に梨花と似てるせいで余計に・・・
「いや、変じやない、だいじょつぶだ」

「うん・・・お兄ちゃん」

さらに永森が引っ付いてくる
すると周りからは

『ここにシン×マコ本はあるか！？』とか
『うはｗｗｗｗｗｗｗｗおｋｗｗｗｗｗｗｗ』とか
『きた！！兄妹カツプリング！！』とか聞こえてくる
中には写真とつてる人も・・・

「うちゃん先輩」

「なんだい？田村一等兵」

「次の本はあのカップリングでいつてみましょうか」「許可する」

「ちなみにせーちゃん先輩

「なんだよ」

「給料はこれで」

「お、さんきゅー」

ハ坂から封筒を受け取る

中には・・・・・

「『永森やまと一田自由券』・・・ってなんだ」つや

「書いてあるとおりです、一田やまとを好きなようついに使用へださ
い！」

「ぶふつ……」ひー？聞いてないわよそんなの……」

永森から抗議の声が上がる

そりや抗議もしたくなるわな

「いいじやんやまとー、これをきっかけに既成事実……」

「そ、そりやあ先輩ならべつにそういうことになつてもいいことこう
か、むしろなりたいといつか・・・けど私たち高校生だし・・・

「やまとー、もどつてこーい」

にしても一日自由か

・・・・やうだな、掃除でも手伝つてもいいおつ

「あー、つかれた・・・・・」

「セイカ君おつー」

「お疲れ様」

「うわつー軽くやつれてるわよ」

同級生組と合流することにはいつも俺はくとくだった

「もう一度と来たくない・・・・

「えー、冬もあるんだからまた一緒に・・・・・

「だが断るーー！」

「ハーモニーの夏は過ぎ去つていった・・・

第六話 おわり

第六話「迷走」（後書き）

やーい、次回のキミセカはー!?

やまとです

先輩に一皿皿田券で家に呼ばれました
先輩と一緒に過ごす・・・少し楽しみです

次回「やまととこつしょー」

おたのしみに

第七話「やめひとりこなしだ」

第七話

「セヒ、こんなもんか」
もともとは永森に手伝つてもいい予定だつた掃除は思いのほか速く
終わつてしまつた
だからせつからくなので、前につかむに教えてもらつたクッキーを作
つていた
我ながら良いできである

ピンポーン

「おひとじ、もう来たのか」「
玄関まで向かう

扉を開けると見知つた顔の後輩がいた

「こんちわ、先輩」「
よう、早かつたな」「
すみません、早すぎましたか?」「
遅れるよりは良いだろ
まあ、入ってくれ」「
永森を俺の部屋に案内する
さて、俺は今日お前を一日好きにできるわけだが……」「
は、はい!」「
好きにくつろいでくれ」「
……は?」「
は?」とはなんだ「は?」とは

「もともと手伝つてもうつもつだつた掃除は終わつちまつたからな

まあ、ここがいやなら帰るのも自由さ

「い、いえ！－ぜんぜん嫌じやないです－！」

「そりが、まあその辺座つてくれよ

クッキー焼いといたからさ」

永森ベッドに座つたのを見て俺は台所に向かつた

クッキーからはまだ香ばしい匂いがする

紅茶のティーパックを引っ張り出してお湯を注ぎ、カップに注ぐ
それをお盆に載せまた部屋に戻つた

「ほれ

「ありがとう」

永森の隣に座る

「・・・・・・・・・・・・

無言で紅茶をすすりクッキーを食べる永森

・・・・・顔が赤いのはなぜだらうか

それはそうといつやつて隣に座ると永森は女の子だなあ、と思つ
クッキー や紅茶の匂いに混じつて女の子特有のいい匂いがする
こなたたちもそうだが、近くによるとみんないい匂いがする
シャンプーの匂いだらうか？

「・・・・・先輩

「・・・・ん？どした？」

俺がそんな考えをめぐらせていると永森が話しかけてきた

「私はくつろいでいいんですね？」

「もちろん、ゆっくりしていいね！－！」

「・・・・・どれじゃあ、お言葉に甘えて」

「ロング、と永森が横になる

頭を俺にひざに乗せて

「・・・・・は？」

「今日一日は、先輩に甘えさせてください」

その永森のセリフで俺はあることを思い出した

中学のころ

『せーちゃん先輩！やまとって実はかなりの甘えん坊なんだよ』
『・・・あいつがか？ぜんぜんそうは見えないが・・・・・』
『だから、あの子が甘えたがつてるときはやさしくしてあげるんだよ！』

『・・・・・そんな日はひねえよ、きっと』

「そんな日が来たよ、おこ」

甘えさせてほしい、か

そういうえば梨花も時々俺の膝枕で寝てたつけ
そのときは確か・・・・・

「・・・・・ん、先輩？」

「いやだつたか？」

頭をなでてやる
できるだけやせしく

「・・・・・ううそ、ありがとう」

永森の言葉遣いがかわる

八坂の言っていた甘えん坊モードだろ？

「・・・・・・・・大好きです」

最後の一言は、小さすぎて俺の耳には届かなかつた

「ふああ、ちよつと俺まで眠くなつてきた」
足がしごれてきたのでそつと永森の頭を浮かして足を抜く
その間に枕を置いてはい、完璧
「ふう、俺も少し横になるか・・・と」

永森の隣に寝転がる

またさつきの女の子のにおいがした
寝顔を覗きながら頭をなでる

つてか、マジで眠くなってきたぞ・・・・・・

やまと v_i e w

「・・・あれ？」

まぶたを開ける

ああ、そういうえば先輩の膝枕で寝ちゃったんだつけ・・・・・

・・・今思い出すとすごく恥ずかしいことをした気がする

あああああくわせ draft goふじこー

・・・・・つて、あれ？先輩は

リビングにでも行ったのかな・・・それともお手洗い？

・・・あ、この布団先輩の匂いがする

男の人なのに結構いい匂い・・・・はつ！なにやつてるの私！？

反対に寝返りを打つ

それでこのバカな考えを吹き飛ばすつもりだったんだけど・・・

「すー、すー」

なななんで先輩が私の隣で寝息を！？

それに何気に腰に手を回されて身動きが・・・・・

あつ！寝息がかかつて・・・

セイカ v_i e w

「ふあ〜、あ〜、寝ちまつたのか

軽く横になるだけのつもつが結構寝てしまつたようだ

あ、永森は？

後輩の姿は探すまでも無く田の前にあつた・・・・・のだが

「・・・・なんで顔真っ赤にして田を回してるんだ？」

その後夕食と一緒に食べた

時間が遅くなつてしまつたので泊まつていいくよつに誘つたんだが激しく拒否された

部屋はあまつてゐから問題ないのにな・・・・・

俺からすると、ただのんびりしただけの一田だった

第七話 おわり

第七話「やめひとりこなし」（後書き）

それで、次回のキミセカは！？

セイカだ

こんどこそ本物の祭りに行くようにこなたに誘われた
花火大会か・・・虫除け対策はばつちりと！…だぜ
そういうばゆたかと岩崎つて仲良いよな
・・・岩崎さん？田が何か怖いそ・・・

次回

「空に花が咲く夜に」

お楽しみに

第八話「空に花が咲く夜に」

第八話

とある日のメール

『祭りにいかないか』

こなた、いいかげんその誘い方は食傷氣味だぞ

と、いうわけで

「ういーす

「お、やつときたわね」

「セイカ君おそいよ~」

俺が待ち合わせ場所につくころにはすでに柊姉妹がそろっていた

「悪い悪い・・・こなたは?」

「見ればわかるでしょ

「まだ着てないんだよね」

まったく、誘つたあいつが遅刻でどうするんだよ・・・

まあ、あいつらしいと言えばそうだが

「おまたへ~」

「やつと来たか

「「」めん」「めん、電車混んでた～」

「全員そろつたし次の集合場所へ行くか」

今回は一年生組みも一緒に行くらしい
ゆたかはこなたの家に住んでるが田村たちと先に合流するやうだ
というわけで、次の駅

「あ、先輩たちきたつすよ」

「コツチでスよー！」

「おねえちやーん！おここちやーん…」

そんな大声出さなくとも聞こえてるって…………

「やふー、コツチはそろつてるねー」

「あとはみゆきの家に行くだけだな」

会場がみゆきの家に近いためそこを最終的な集合場所にしてくる
岩崎は家が近いからわざとみゆきの家に行つてくるやつだ

「わい、そろそろ行くか」

「あらー、いらっしゃーい

みゆきの家に着くとゆかりさんが出迎えてくれた
相変わらずのほほんとしたお方である

「みなさん、いらっしゃいませ」

私服姿のみゆきが出てきた

なんか高そうな服着てるな

さすがはお嬢様

「いえいえ、これは軽く着こなすために買つたので2000円くらい
いなんですよ」

「マジですか！？」

つまりはあれか？お嬢様補正のせいで高級品に見えたのか…

「みゆきさんはオーラが違うからねー」

「みゆきが身につけるとなんか高そうに見えるわよね

「これも生まれの差つてやつだな」

「・・・セイカ君も見た目は人のこといえないよね
こなたが何か言つてるがよく聞こえなかつたのでスルー
どうせろくでもないに決まつている

「お、岩崎はもう来てたんだな」

「・・・こんばんわ、先輩」

我らがクールでかつこいいみなみわやん」と岩崎みなみである
「クールでかつこいい・・・ふくく」

なぜかゆかりさんが笑い出した!!

「えと・・・その・・・」

そしてなぜか岩崎の顔が赤くなつてゐる!!

「(。・。)何ゆえ!!」

(=) いつちみんな

冗談はこのくらいにして

「はい、よかつたら食べていいって」

俺たちの田の前に並べられたお高そうなメロン!!

ちなみに今みゆきの胸を想像した奴は表に出る

「ちがうねセイカ君!!みゆきさんはスイカだよ!!」

「た、たしかに!!」

「お前ら自重しろ、つていうか、セイカ君はひつち(突つ込み)側
でしようが

いつしょになつてボケでびりゅんのよ」

「正直スマンかつた」

俺たちがメロンを堪能してるとみゆきが浴衣に着替えてやつてきた
しかしあれだな

「これだけかわいい子たちが浴衣姿だと壮觀だな」

(また始まつたよ・・・セイカ君の「フラグ建築」)

(もはや病気よね)

(どんだけ)

ところ変わつて花火会場

え？ 移動が三行の改行で終わつてるつて？

気にスンナ、俺も気にしない

「もうすぐですかね～」

「ヒヨリ、気が早すぎテス」

はしゃぐ者もいれば

「たまやーーー！」

「まだ始まつてないわ！！」

ボケに見事な突込みを入れる者も

「ゆきちゃんもたべる？ わたがし」

「あ、いただきます」

のんきにわたがし食つてるのもいる

ちなみにお値段は136円

なんともまあ・・・微妙な数字だ

まあ、そんなことよりも・・・

「・・・・ゆたか、大丈夫？」

「だ、大丈夫だよみなみちゃん」

「ん？ 大丈夫かゆたか

顔色悪いぞ」

ゆたかの体調が優れないのか顔を青くしていた

「だ、大丈夫・・・おにいちゃんは花火を見てて？」

「何言つてんだ、少し人ごみから離れよう」

近くにいたこなたに事情を話して人ごみから外れた

「岩崎、飲み物買つてくるからゆたかをたのむ」

「あ・・・はい」

俺はさつき見つけた自動販売機まで走った
さて、ゆたかは気分が悪いみたいだしジュース系よりもお茶のほう
がいいかな

サンリーのウーロン茶を買ってさつきの場所に戻った

「ただいま・・・って、ゆたか寝ちゃったのか?」

「あ・・・はい、少し横になるつて言つてそのまま」

ならしようがない

岩崎がゆたかに膝枕してるので俺はベンチの開いてる場所・・・岩
崎の隣に座つた

「お前はつらくないか?」

「大丈夫です」

遠くでは花火の光が見える

さつきの場所ほどではないがここからでも十分花火は堪能できるだ
るつ

「・・・・・平野先輩」

「ん? どした」

「私は・・・ゆたかに必要なんでしょうつか」

「・・・・・は?」

いきなり何を言い出すのだらつ

「ゆたかと友達になつて・・・私がゆたかを守らないといつて思いました

した

だけど、それは先輩にもできる」とや・・・

「・・・・・」

「さつきもそうです、先輩はゆたかのためにつて動くことができた
のに私はどうしたらいいのかわからなくて」

「・・・・・」

「だから、私なんかより、先輩が・・・・・」

「うりや!」

びしつ!..

「やめつー。」

岩崎に「ゴピンを入れる

な、なにを・・・

「今の言葉、ゆたかの前で言つてみろ
俺はお前を軽蔑するね」

「え・・・・・・」

「お前は難しく考えすぎなんだよ

友達つてさ、一緒にいたいから友達なんだよ

「・・・・・・」

「そんな難しい理屈なんかいらぬ

話したい、仲良くしたい、一緒にいたい

それだけでいいと思うけどな」

なんて、何俺が偉そうに語つてるんだか

こなた達がいなかつたら、俺は今頃・・・・・

だつたら、みんなが俺にしてくれたことをこいつにしてやればいい

俺たちが、親友になつた日にしたことを

「いいか、先輩命令だ」

「は、はい？」

反論は一切聞きません

「俺のこと、セイカつて呼べ

わかつたな、みなみ

「え・・・・・・?」

あの日

互いに名前で呼び合つたあの日

俺は初めてあいつらを友達と意識したのかもしけない

「ほれ、呼んでみろよ」

「え・・・・その・・・・」

「ほれほれ」

「・・・・・セイカ・・・・せんぱい」

ふむ、まあ先輩付けくらいは勘弁してやるが

ゆかりさんが「こいつを弄りたがるのもわかる気がする

ゆたかもすつかり目を覚ましたこの

こなたたちが戻ってきた

「お～い、きれいだつたね～」

「ああ、こんなどこでも結構見えるもんだな」
だが、みんなはしきりに腕や足を搔いている
まさか、雛見沢症候群……

なわけないか

「けど、漫画面みたいにきれいなまんまでは終わらないよね、いっぺ
い刺されたよ」

「つづ～かゆい～」

どうやらみんな蚊に食われたようだ

「ゆたか、みなみ、お前らは平氣か？」

一応無視刺されの薬は持ってきたんだが

「私は・・・大丈夫です」

「私も大丈夫だよ」

そか、ならこれはこっちの少女軍団にわたすとしよう
「蚊に刺されやすい人と刺されにくい人つているよね～」

「いや～、これは蚊が空氣呼んだんでしょ」

そういうところなたがスス～とよつてきた

「いつの間にかみなみちゃんにもフラグを立てたご様子」

「何の話だ」

みんなを駅まで送つて別れた

「今日は、みなみとの距離が少し縮まった気がするな」
やっぱり、女の子は笑つてるほつが似合つ

それはみなみも例外ではないさ

「さて、さつさと風呂はいつて寝るかーー！」

その夜に、俺は大量に蚊に刺された

第七話 おわり

第八話「空に花が咲く夜に」（後書き）

さーて、次回のキミセカは？

こなたです

お盆だというのに・・・なぜ補修がある！！！
つて、あれ？あんな子うちのクラスにいたつけ
つて、あの名前・・・えええ！！

次回

「一日だけの再会」

あれば・・・セイカ君の・・・

お楽しみに！！

第九話「一日だけの再会」

第九話

「あづ～い、だる～い、めんどくせ～い」

「熱い熱い言うな、余計に熱くなるだろ」

今日も赤点組の俺とこなたは補修だ

「つていうか、なんでお盆なのに補修があるのやーーー！」

「それは陵桜が進学校だと言う事実でなかつたことになる」

簡単に言うと「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄あ！！」ってことだ

意味がわからないって？俺にもわからん

「うい～す」

と言つても今日この教室にいるかおなじみはこなただけだが
そう、つかさはこの前の小テストでまともな点をとつたので補修が
終わっているのだ

妬ましい・・・ぱるぱるぱる

「あ、～、クーラーの効いた部屋が非常にうれしく感じるのは～

「まあ、否定はしないけど」

「・・・つて、あれ？」

「どした？」

こなたが前方の席を凝視している

何かあるのだろうかと思つて俺も見てみる

「ねえ、セイカ君

うちのクラスにあんな子いたっけ

こなたが指差してるのは長い黒髪の女の子

「・・・確かに見覚えないな、他のクラスの奴じゃないのか？」

「よし、聞きに行こ!」
「こつてらつしゃい」

「セイカ君が……」

「俺かよ……」

「ああ、あんたちょっと……?」

・・・・・まあいい、このノリもこつものことだ
その女子生徒の席に向かう

そして、声をかけた

「なあ、あんたちょっと……?」

その女子生徒が振り向いた

一言で言えば、かわいい

だが、俺が驚いたのはそんなのが理由じゃなかつた

(・・・・・梨花?)

今はもういない、俺の妹

梨花にそっくりだったのだ

もし、あの後も生きてて無事に育つたらこいつなっていただろう

「・・・・・どうかしたの?」

「あ、いや……あんたこのクラスの人じゃないよな?
何組だ?」

「・・・・・うん、私はこのクラスの人じゃないよ

やつぱりそのようだ

だけど今はそんなことよりもこの少女の姿が気になる

「ちなみに言うと、この学校の人でもないよ」

「・・・・・え?」

その少女は立ち上がり、俺に近づいた

そして、抱きついた

「・・・・・久しぶり、お兄ちゃん」

がしつ！…その子の手をつかむ

その手を引っ張りながら俺は教室のドアを開けた

「こなた！お前もきてくれ！…」

「え、ちょ！…セイカ君！？」

そしてそのまま走り出した

ところ変わつて、屋上

「さて、あんたには聞きたいことがある」

「実の妹にあんたよばわりはひどいと想いまーす」

「ふざけんな！俺の妹はもう・・・・・

「死んでる、だよね」

「・・・・・そうだ」

この少女はどこで俺のことを知ったんだらつ
そもそも、俺が今まで気を句をなくしてたからその事実を知つてい
たのは両親のみ

取り戻した後でも知つてるのはこなた、かがみ、つかさ、みゆきだ
けだ

「そりやあ知つてるよ、本人だもん」

「そんなわけあるか！…ふざけんのもいい加減にしろよ！…」

つい大声を出す

この少女の外見が似ているがゆえに、あまりにも雰囲気が同じゆえに
「セイカ君落ち着きなよ！…」

「・・・・・・

こなたの一喝で押し黙る
すると、少女が口を開けた

「・・・・・・お兄ちゃんの恥ずかしい思い出、その一～」

「・・・・・・は？」

「私を助けようと喧嘩を始めたとたんに転んで氣を失つて保健室送りになつた」

「なつ！」

「その二つ、キャンプに行つたときに森で遊んでたら顔にクモがくつづいて泣いてた」

「ぶふつ！」

「そのせこ・・・・・」

「も、もういい！…わかつた！！」

この事實を知つてるのは両親か梨花ぐらいしかいなはず……

つてか、こなた！…笑うな…」

「ふつふ～ん、ちなみにその三十六まであるよ～」

み、認めるしかない・・・・・

こいつは、梨花だ

「で、なんで死んだばずの梨花がこんなところにいるんだ？」

足もある、触れられる

どう考へても幽霊じやない

「セイカ君、死者蘇生の魔法カードでも使つた？」

「ネタに走るな

で、どうしてなんだ？」

「だつて今日はお盆じゃない」

・・・・・お盆と言つ理由で死んだ奴がよみがえつてたら
今頃世界は大騒ぎだ

聖徳太子が実在したかも確かめられるぞ

「実は私もよくわかんないんだ」

なんて投げやりな・・・・・

「まあまあ、細かい」とはいいじやないのさセイカ君

こなたが小声で俺に話しかけてくる

（お盆に戻ってきたって事は、たぶん明日にはいなくなっちゃうん

だと思つよ)

・・・・そうか

つていうか、戻ってきた理由なんてどうでもいいじゃないか

「なあこなた、先生に俺は早退するって言つといてくれないか?」

「・・・・うん、まかせといて!」

俺は立ち上がると梨花の手をつないだ

「ど、どうしたのお兄ちゃん?」

「今日は遊ぶぜ!! 丸一日な!!」

「が、学校は!?

「川、一人、) 何、気にすることはない」

俺は梨花を連れて走り出した

第九話「一日だけの再会」（後書き）

それで、次回のキミセカは！？

梨花です

これから、お兄ちゃんと遊びます！！

きっと明日はもういなけれど・・・

今は甘えてもいいよね・・・？お兄ちゃん

次回 「想いは共に」

おたのしみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5639g/>

らき すた キミがいるセカイ NW

2010年10月10日18時20分発行